

日本で公開されたディズニー映画『ふしぎの国のアリス』*

Alice in Wonderland: Walt Disney's Picture Released in Japan

木下信一

Shinichi KINOSHITA

はじめに

ウォルト・ディズニーによる長編アニメーション『ふしぎの国のアリス』*Alice in Wonderland* は 1951 年に製作された。封切り当初は不評であったこの映画は、今ではテニエルの挿絵よりも一般的に知られるようになっていく。日本では本国公開の 2 年後、昭和 28 年の夏にこの映画は封切りされている。その後二度のリバイバル上映を経て、現在、日本でもアメリカと同様にテニエル以上の知名度を誇っている。

現在にいたるも『アリス』のイメージとして強く印象づけられているディズニーの映画ではあるが、封切り時には、日本ではさして大きな影響を与えるものではなかった。それが現在、ここまで大きな影響を与えることになったのは、何の影響が大きかったのか。映画の封切時の様子や再映状況、ビデオやテレビ、レコード等による他のメディアへの展開状況、それに当時の出版状況を見ることで、いつの時点からディズニー映画が影響を与えるようになったかを考察する。これにより、日本でディズニー映画版『アリス』が定着した時期を推定し、通常考えられる映画上映や絵本以外に、レコードのような音声メディア、テレビ放映、さらには物語から切り離されたキャラクターグッズも映画同様に大きな影響を与えて来たことを明らかにしたい。

ディズニー映画上映までの状況

『不思議の国のアリス』†本邦封切りまでの『アリス』映画とディズニー映画について、主要な出来事を表 1 に示しておこう。

表 1. ディズニー映画『不思議の国のアリス』上映までの主要な出来事

1933 (昭和 8)	パラマウント映画 <i>Alice in Wonderland</i> アメリカ封切り
1934 (昭和 9)	パラマウント映画『不思議の国のアリス』日本公開
1937 (昭和 12)	ディズニー映画 <i>Snow White and the Seven Dwarfs</i> アメリカ封切り
1951 (昭和 26)	ディズニー映画 <i>Alice in Wonderland</i> アメリカ封切り
1951 (昭和 26)	ディズニー映画『白雪姫』日本公開
1953 (昭和 28)	ディズニー映画『不思議の国のアリス』日本公開

* 本稿は 2006 年 11 月 4 日、第 12 回日本ルイス・キャロル協会研究大会にて発表したものに内容を増補し文章化したものである。

† 昭和 28 年に封切りされた際、この映画の邦題は『不思議の国のアリス』と表記されていたが、パンフレット等の本文での表記は『不思議の国のアリス』であった。本稿においては、封切り時の邦題は『不思議の国のアリス』、ディズニー映画そのものは『ふしぎの国のアリス』、キャロルの原作は『不思議の国のアリス』の表記とした。

1937年、アメリカで『白雪姫』が封切りされた時点での日本は、海外映画の輸入が制限されていた。この制限は戦後になり解除されるが、パラマウントやMGMといった大手の配給会社と契約しておらず、独立したプロダクションであるウォルト・ディズニー・カンパニーは、二社の配給によって上映されることになる。一つはディズニー傘下のRKO RADIO、もう一つは大映である¹⁾。戦後のディズニーのアニメーションの日本公開について表2に示す。

表2. 戦後のディズニーのアニメーションの日本公開

日本公開年月	タイトル	本国公開年	配給	備考
1950年9月	白雪姫	1937年	大映	
1951年5月	バンビ	1942年	大映	
1952年2月	南部の歌	1946年	大映	
1952年5月	ピノキオ	1940年	RKO	
1953年3月	シンデレラ	1950年	RKO	
1953年8月	不思議の国のアリス	1951年	RKO	
1954年3月	ダンボ	1941年	大映	初の吹替版
1954年8月	こぐま物語：がんばれボンゴノミッキーと豆の木	1947年	大映	
1955年5月	ピーター・パン	1953年	RKO	
1955年9月	ファンタジア	1940年	大映	
1956年8月	わんわん物語	1955年	大映	
1960年7月	眠れる森の美女	1959年	RKO	

(柳生すみまる「2002 ディズニー革命 Vol.20 日本におけるディズニー絵本 Part1」
『DISNEY FAN』2002年8月号 pp.47-51 のデータを元に再構成。表記は柳生に従った)

ディズニー長編映画の第一号である『白雪姫』が、戦後の日本封切りでも第一号となる。その後、年に平均二本のペースで長編映画の紹介が続く。平均して2年に一本のペースで作られてきた過去の作品を封切りしつつ比較的新しい新作も紹介するため、本国における製作時期と日本での封切りの時間差が一年程度に納まるのは昭和31年、『わんわん物語』の日本公開においてであった。そういった事情があり、ディズニー映画の輸入再開時の新作であった『不思議の国のアリス』の日本公開は、本国での封切りの二年後になっている。

一方、出版メディアはどうであったか。昭和における『不思議の国のアリス』の出版は、昭和9年の長沢才助『不思議の国のアリス』、大戸喜一郎『不思議の国のアリス』以降、終戦までない。戦後は『鏡の国のアリス』の翻案である西条八十『不思議の国』が昭和21年1月に出され、同年11月より大佛次郎が雑誌『少年讀賣』で『不思議の国のアリス』のリライト『不思議の国のアリス』連載を開始する(全4話で終了)。戦後からディズニー映画封切りまで絵本、リライトを含め『不思議の国のアリス』が出版されてきた、その状況を時系列にして表3に示す。

昭和27年11月に発売された『Walt Disney's ふしぎの国のアリス』は、ディズニー映画と同じキャラクターデザインで、輪郭をぼかした水彩画風の絵を新たに描いた絵本である。これはアメリカでのディズニーの映画の絵本 Golden Books のシリーズを日本で翻訳したもので、後のセル画風の絵本とは大きく違う。ディズニーの「アリス」は、映画封切り以前の

昭和 27 年に、絵本『Walt Disney's ふしぎの国のアリス』として日本に上陸していたのであった。

表 3. 戦後から『不思議の国のアリス』封切り年までの『不思議の国のアリス』出版状況

昭和 21 年 1 月	西条八十『不思議の國』(『鏡國めぐり』改題)
昭和 21 年 11 月	大佛次郎『不思議國のアリス』(雑誌『少年讀賣』 連載。昭和 22 年 2・3 月合併号まで)
昭和 22 年 7 月	児童文化振興会訳『アリスものがたり』
昭和 23 年 5 月	楠山正雄訳『ふしぎの国のありす』
昭和 23 年 9 月	菊池侃訳『ふしぎな国のアリス』
昭和 25 年 1 月	吉田健一訳『ふしぎな国のアリス』
昭和 25 年 12 月	楠山正雄訳『ふしぎの国のアリス』
昭和 26 年 5 月	梶原秀男訳『不思議な国のアリス』
昭和 26 年 6 月	平塚武二訳『不思議な国のアリス』
昭和 26 年 8 月	中村ひろし著『ふしぎの国のアリスちゃん』(名作まんが)
昭和 27 年 2 月	村岡花子文『不思議の国のアリス』
昭和 26 年 3 月	岩崎民平訳『不思議の国のアリス』
昭和 27 年 4 月	三島由紀夫文『ふしぎの国のアリス』
昭和 27 年 10 月	『ふしぎな国のアリス』(世界名作漫画文庫)
昭和 27 年 11 月	『Walt Disney's ふしぎの国のアリス』(ディズニーのまんがえほん)
昭和 27 年 12 月	岩崎民平訳注『ふしぎの国のアリス』
昭和 28 年 3 月	高島正恵訳『ふしぎな国のアリス』
昭和 28 年 3 月	楠山正雄訳『ふしぎの国のアリス』
昭和 28 年 4 月	大木雄二『ふしぎの国のアリス』(雑誌付録『こども家の光』 連載。6 月号まで)
昭和 28 年 8 月	訳者不明『ふしぎの国のアリス』(カバヤ児童文庫)
昭和 28 年 10 月	村岡花子訳『ふしぎな国のアリス』
昭和 28 年	『ふしぎの国のアリス』(傑作漫画文庫)

(川戸道昭他編、『児童文学翻訳作品総覧 第 1 巻【イギリス編】』を元に修正・追加した)

アメリカでの封切り時の様子

日本における封切り前夜の状況について述べた。一方、アメリカでの封切り状況はどうであったらうか。

すでに知られているように、アメリカにおける『ふしぎの国のアリス』封切り時の評判は、決して芳しいものではなかった。ウォルト・ディズニー自身、この映画の脚色には手を焼いている。

しかし実のところ、ウォルトは『不思議の国のアリス』に対して、何か気の進まないものを感じていた。そもそもこの作品の映画化には、一九三三年以来、二十年近くも取り組んでいた。当初は女優のメアリー・ピックフォードにアリスを演じさせようと考えていたが、その後何年もたってアニメーション映画にしようと考えを変え、脚本作りをはじめていた。が、さらに何度も企画が流れた結果、ついに『シンデレラ』のあとへもってきたといういきさつがあったのだった。

(中略)

彼は、アニメーション映画としての効果をあげるためストーリーを変更しようと試み、

たとえば、“白の騎士”の役割を拡大してアリスを救いだす英雄に仕立てあげることなどを考えたが、ルイス・キャロルの原作を純粋に守ろうとする者たちから脅迫を受け、諦めざるを得なかった。……

(中略)

『不思議の国のアリス』の一般公開にあたり、ウォルトは、原作に忠実であることを要求する観客にも、またウォルト・ディズニーという名前から娯楽作品としての楽しさを期待する観客にも、どちらにも満足してもらえなかったのに、その当では外れてしまった。作者ルイス・キャロルの国であるイギリスで封切りとなったこの映画を、ロンドンの批評家たちは原作に忠実でないと酷評したし、またアメリカ国内においても観客はこの映画に失望した。興行赤字は百万ドルにのぼり、『シンデレラ』がせっかくもたらしてくれたディズニー・プロダクションの好景気がはかなくも消え去る結果となってしまったのである²。

ウォルトの兄ロイは、映画製作中から、この作品が「当たらない」ことを見通していた。そのため、映画封切り時には半ば詐欺まがいの売り方をしている。

「不思議の国のアリス」の公開について、ロイは特別な方法を考え出している。製作当初から好きになれない作品だったが、完成品を見たとき、「白雪姫」などのディズニーのアニメ映画にあるような魅力がまったくないことを知った。ブエナ・ビスタの営業マンに、できるだけ多くの劇場に「アリス」の上映予約を取りつけるよう伝え、広告宣伝部には大規模な販促キャンペーンの準備を指示した。この戦略が奏功した。通常の二倍の数の劇場で公開し、最初の二週間の興行収入は他のディズニー映画を上回った。そして、映画の成功に不可欠な口コミの評判が下がると、ロイの予想通り、売り上げは急減した³。

では、ここでいう「白雪姫」などのディズニーのアニメ映画にあるような魅力」とはどういうものであろうか。これについて、『白雪姫』と、同時期に日本で公開された他のアニメーション映画とを比較した考察がある。

ウォルト・ディズニーが常に「かんじんなのはよいストーリーだ」と繰り返したのは、「不幸なお姫様が王子様と結婚する」というようなストーリーのことではない。

魅力あるキャラクターを作り出し、

そのキャラクターたちに明確な性格を与え、それに沿った行動や演技をさせ、

観客の心を掴んで離さない展開や演出によって語る物語自体の持つ力と、

ストーリーテリングの技術が不可欠だ

という意味だ。これは短編だろうと長編だろうと同じである。その技術で私たちを魅了したのだ⁴。

この考察から『ふしぎの国のアリス』を見てみよう。「魅力あるキャラクター」については評価が分かれるだろう。ただ、これまでのディズニーの登場人物のような「人間らしさ」、観客が感情移入できる余地が少ない、という点は指摘できる。「明確な性格」については、登場人物によって違うといえる。しかし、少なくともキャロルの原作に引っ張られたため、「性格にあった行動や演技」をしているキャラクターは多くはない。キャラクターについて上記三要素をすべて含むとしたら、原作にも出ているチェシャ猫と、ディズニーのオリジナルの登場人物であるドアノブくらいであろう。「物語自体の持つ力」に至っては、この、筋力のない『ふしぎの国のアリス』という物語に求めるのは酷ですらある。この映画は、どの点から見てもディズニーの映画としては「鬼っ子」だったのである。

日本封切り時のパンフレット類

『不思議の国のアリス』日本封切り時の状況を見てゆく。最初に、映画供給側の視点として、封切り時のパンフレット類を見る。

確認できる限りにおいて、封切り時にはプレスブック（RKO RADIO 発行）一種とパンフレット三種（配給元である RKO RADIO 発行のもの、映画館の系列である松竹洋画発行のもの、ライオン・RKO・ムービー・クラブ会誌「L.R. News」）が発行されている*。パンフレットは基本的に配給元である RKO RADIO 発行のプレス・ブックから適宜抜粋したもので、映画スチル等の採用が一部異なっている。ただし、松竹洋画版のパンフレットではオリジナルなものとして「二つの映畫」という記事が掲載されている。そこでは、パラマウント版の『不思議の国のアリス』について述べられている。

この「不思議の国のアリス」は廿余年前にはじめてパラマウントで映畫化された。この

* プレスブック：A3 版二枚を横につないだ形での一枚もの。A4 版に折られて全 8 ページ、オールカラー。4 ページ・16 コマの映画スチルによるストーリー紹介、登場人物と声優一覧（主要登場人物については声優の顔写真付き）解説、原作について、挿入歌の歌詞（英語）主演・キャスリン・ビューモントについて（白黒写真つき）アメリカで発売されているレコードの紹介、製作スタッフ、Sequences and Songs。パンフレット（RKO RADIO 版）：AMERICAN MOVIE WEEKLY の中の一冊。B5 版 8 ページに、別紙として併映映画『水鳥の生態』の解説 1 枚（B5）が挿入されている。白黒。主演・キャスリン・ビューモントについて（本文はプレスブックと同一、写真は別のもの）解説（プレスブックと同一）ストーリー紹介（本文はプレスブックと同一。スチルは本文とは別に最終ページに 8 コマ、別の解説文を伴って収録）原作について（プレスブックと同一）登場人物一覧と説明、挿入歌の歌詞（英語。プレスブックと同一）パンフレット（松竹洋画版）：B5 版 10 ページ、白黒。解説（プレスブックと同一）、映画スチルによるストーリー紹介（本文はプレスブックと同一。スチルは 8 コマになっている。スチルの選択は RKO 版パンフレットと同じ）原作について（プレスブックと同一）主演・キャスリン・ビューモントについて（本文はプレスブックと同一、写真は別のもの）挿入歌一覧（題名と原題名の記載のみ）南部圭之助「二つの映畫」（『不思議の国のアリス』、併映映画『水鳥の生態』の解説エッセイ）併映映画『水鳥の生態』解説。パンフレット（「L.R. News」No.24）：ライオンと RKO ラジオ主催の「ライオン・RKO・ムービー・クラブ」会誌。月刊の会誌のディズニー映画特集号ではあるが、会誌の性質上、RKO 発行のパンフレットとして扱う。B6 版（実際にはそれよりやや小さい）・横長 14 ページ、白黒。表紙はキャサリン・ボーモントの白黒写真。「特集 来らんとするディズニー映画」として、『不思議の国のアリス』7 ページ、『水鳥の生活』3 ページ。『不思議の国のアリス』については解説、原作について（アリス・リデルの写真つき）主演・キャスリン・ビューモントについて（白黒写真つき）製作スタッフ、Sequences and Songs（ここまで本文はプレスブックと同一）登場人物一覧と説明（本文は RKO 版パンフレットと同一）ストーリー紹介（全 16 コマ。プレスブックとは異同あり。うち 8 枚は松竹洋画版パンフレットと同一）挿入歌の歌詞（プレスブックより抜粋）

時には面白いエピソードがあつて、二、三年前に、権利賣りの小さな廣告がイギリスの新聞に出ていた。訊ねてみたら、「不思議の國のアリス」だつたそうで、之を映畫化し様という時に、パラマウト(原文ママ)でそれを憶えていた爲、獲得出来たそうである。その時、脚色をしたのが、今は脚色兼監督としてときめく、ジョーゼフ・マンキーウィッツであつた。

その頃は、パラマウントは傍役に手持ちを澤山もつていたので大變便利であつた。……アリスはシャーロット・フンリー(原文ママ)という無名の少女がやつていた。之だけの顔ぶれを揃えていたが、やはり、マンガの用(原文ママ)にはうまく出来なかつた。

この時は、原作者がその名をとげたリデル牧師の二番目の娘アリスは、アメリカでまだ八十二歳で生きていたそうである⁵。

ディズニー映画の紹介された昭和二十年代末には、まだパラマウント版の『不思議の國のアリス』は憶えられていたのである。

日本封切り時のマスコミの記事

次に、映画の受け手側の様子を見てみよう。当時の観客の感想というものは残りにくいので、マスコミに掲載された批評家たちの反応を見る。

雑誌では『キネマ旬報』『スクリーン』『映画の友』に映画の記事が見られる。

『キネマ旬報』では昭和28年8月下旬号の「新作映画紹介」、9月下旬号の「外国映画批評」で紹介されている。記事はどちらも、複数ある映画評の中の一項目という扱いだ。

原作の発端は、アリスが鏡の中に踏み込んでいつたが、あの見事なファンタジイの導入も、映画ではうさぎを追いかけて洞穴に入つてゆくなどという不手際なはなしに書き直されている。こう考えてくると、映画は原作の精神を借りずに、少女の空想という額縁だけ借りて、中身はすべてディズニー・アイデアで埋めることが最初からのねらいだつたらしい⁶。

この映画評を読んで、現代の読者は奇異に思うのではないだろうか。「うさぎを追いかけて洞穴に入つてゆく」というディズニーの映画の発端は、原作をそのまま映像化したものだからだ。一方、「アリスが鏡の中に踏み込んで」ゆくのは、『鏡の國のアリス』の冒頭である。実は、評者が「原作」と思いこんでいるのは、パラマウント版『不思議の國のアリス』の発端なのである。パラマウント版では、話の冒頭は冬、鏡を抜けたアリスが家の外へ出ると白兎がいるのでそれを追いかけて兎穴へ飛び込む、という形になっている。そこから『不思議の國』『鏡の國』と筋が展開してゆく。評者は、この映画を見て、原作もそうだと思いこんで書いたのだ。

次に『スクリーン』だが、昭和28年8月号に、新入荷作品紹介として白黒グラビア3ページの記事がある。内容は解説、スチル写真11コマによるストーリー紹介(プレスブック

にないスチルもあり。本文はプレスブックのものを適宜要約しながら、独自の訳語 March Hare がプレスブックでは「あばれうさぎ」に対して、ここでは「三月野兎」を使用している) 登場人物のスチルと声優の写真(帽子屋、ハートの女王、チェシャ猫)、気違お茶会のスチルとモデル撮影・演技指導風景の写真。キャサリン・ボーモントについての記述はない。解説には以下の記述がある。

.....ルイス・キャロルの原作は今から百年前、可愛い少女アリスと庭を散歩している彼女が、アリスにせがまれるまゝに語つたお話を物語に書き上げた。物語は単にユーモアに満ちているばかりでなく、そのかげに鋭い諷刺と人生教訓が含まれている。.....⁷

ここでは、ルイス・キャロルが女性にされてしまっている。この文はプレスブックにある解説の、以下の文から作成したと思われる。

ルイス・キャロル原作の「不思議の國のアリス」は今から約百年前、心地良暖い夏の英國で、折柄可愛い少女アリス・プレザンス・リッデルと庭を連れだつて散歩していた作者が、アリスにせがまれるままに語つたお話である。後に友達に云われてキャロルはこれを物語に書き上げ、出版されたのは三年後の一八六五年であつた。以後今日に至るまで世界で最も愛される物語の一つとして親しまれている。それはこの物語が単にユーモアに満ちているばかりでなく、そのかげに鋭い諷刺と人生教訓が含まれている為で、.....⁸

プレスブックを引き写すのではなく、わざわざ書き換えた部分に誤りがあつたことになる。これら二誌に対し、『映画の友』はよく調査した上で書かれており、誤りがない。掲載されたのは昭和 28 年 9 月号で、内容はカラー見開きで映画紹介と、同じく見開きで「映画鑑賞講座」。「映画鑑賞講座」では、原作について、戦前のパラマウント版について、そしてティニエルの挿絵についても紹介されている。

.....その喋る言葉が、おそろしく洒落のめされていることである。それがほとんど英語の成句や俗謡などをひねつたもので、本當のおもしろさは英語をマスターしたものでなければ味わい得ないといわれている。.....(中略).....キャロル(原文ママ)はその後「鏡をこえて」Through the Looking Glass その他の物語を発表して本職よりも作家として有名になつた。

「不思議の國のアリス」は一九三三年にパラマウントで映画化されたことがある。ウィリアム・キャメロン・メンジスとジョセフ・L・マンキウィッチが共同脚色し、ノオマン・マクロウド(原文ママ)が監督に當つたオール・スタア映画だつたが、出来ばえはあまり香ばしくなつた(原文ママ)。

(中略)

(なお、この映画の人物は原作に挿入された、非常に有名なサア・ジョン・ティニエルの繪を非常にうまくディズニー化されていることも注意される。)歌と音楽が總體にい

つものディズニー作品にくらべて弱體なのがちよつと残念だつた⁹。

三誌の中では、この『映画の友』が、最も詳細にこの映画を紹介している。

雑誌での紹介は上の如くだとして、新聞ではどうであったか。朝日新聞と毎日新聞の記事を見る。

朝日新聞では昭和 28 年 8 月 25 日夕刊に「新映画」として映画評を掲載している。「美しい色彩と音楽」との見出しで紹介されている。

……ルイス・キャロルの原作は、わが国でも広く読まれているし、おとなたちも、この漫画映画を通して、幼年時代を楽しく回顧することが出来るだろう。……¹⁰

毎日新聞は昭和 28 年 8 月 24 日夕刊に「映画」として簡単なあらすじを掲載している。「おもしろい『ゆめ』のまんが」との見出し。子供が読めるように、ほとんどがひらがなで書かれている。

おねえさんにイギリスのれきしのはなしをきいているうちに、アリスはねてしまう。たくさんのおもしろいゆめがあとからあとから出てくる。それをきれいなまんがにした映画だ。……¹¹

当時の雑誌、新聞の記事を見ると、現在、我々がよく接するキャロルや『アリス』に関する「間違い」は、すでに、この時期には生まれていたことが判る。ここで見られる間違いを列挙するなら、

- ・ ルイス・キャロルを女性だと思いこむ。
- ・ 映画の筋を、そのまま原作だと思いこむ（現在のディズニーのアニメーションに当たる役割を、昭和 9 年封切りのパラマウント版『不思議の國のアリス』が果たしている）。

となろうか。では、なぜこういう間違いが生じたのであろうか。こういった間違いは、昭和 9 年にパラマウント版『不思議の國のアリス』が封切りされた時には見られなかったものである¹²。最大の、そして唯一の理由は、評者たちが「原作を読んでいない」という点にある。では、なぜ原作を読まずに済んだのか。これについては、以下の点が考えられる。

- ・ 原作が、すでに知られた作品であった。昭和 9 年の時には、原作を知っている人が少なかったので、映画評論の中で原作、原作者キャロルについての解説が必須であった。原作がよく知られるようになると、こういった解説は不要となり、解説者がわざわざ原作を読む必要もなくなった。
- ・ プレスブックが配られている。この映画のプレスブックの記載は非常に詳細にわたるた

め、わざわざ原作に戻る必要はない。

- ・ 昭和9年の『不思議の国のアリス』の影響があった。後にディズニー映画を観ることで原作を読んだ気になる人が増えたのと同じく、パラマウント映画を観たことで原作を読んだ気になった人が出てきていた。

原作が、その実態はともあれ名前のみはよく知られていたが故に、かえって原作に立ち戻ることがなかったという逆説的な状況が見取れる。ただ、上記のように、雑誌や新聞での取り上げ方をみても、この『不思議の国のアリス』が封切り時にマスコミで大きな取り上げられ方をしていたようには見えない。同じディズニーの長編アニメーションでも、たとえば『白雪姫』や『バンビ』の時は、雑誌で対談記事まで企画された。また、パラマウント版の『不思議の国のアリス』では、詳細な紹介記事が雑誌に掲載された¹³ことを考えると、その扱いは大きなものではなかった。

この点については、当時のディズニーのアニメーションの上映形態も関係していると思われる。前述の表2にあるように、日本におけるディズニー長編アニメーションでは、昭和29年封切りの『ダンボ』が初の吹替上映であった。『不思議の国のアリス』は、日本初公開時は字幕上映だったことが判る。また、パンフレットやプレスブック、『映画の友』の紹介記事でオリジナル版の声優の紹介をしていること、挿入歌のタイトルを日本語と英語で紹介していることなども、字幕上映であったことを示している。

この時期に公開された、『白雪姫』や『シンデレラ』といった他の映画に比べ、そこまで人口に膾炙した話ではなく、『ピノキオ』や『バンビ』のように解りやすい筋立てでもなかった。その上、字幕上映であることから、子供には理解しにくかったと考えられる。『不思議の国のアリス』は、日本初公開の時には大きな影響を残したとはいいいにくい。

もちろん、これは一般論としてそういえるであろうということであり、全く影響がなかった訳ではない。たとえば和田誠は、以下のような回想をしている。

『不思議の国のアリス』が名作童話だということで、読んだのは中学生のときだったと思いますが、これがちっともおもしろくなかったんです。そのおもしろさが少しだけわかったのは高校に入ってからです。それはディズニーのおかげでした。

ウォルト・ディズニーは世界の名作をみんなアメリカナイズしちゃうって悪く言う人もいます。それも一理あると思いますが、ぼくにとってはちょっとちがう。ぼくの高校時代に『不思議の国のアリス』がディズニー映画になりました。ぼくはそれを観たあと、アメリカで出版されたその絵本版を買ったんです。……¹⁴

しかし、マスコミの扱いを見る限り、総じて『不思議の国のアリス』は、封切り時には大きな影響はなかったといえよう。

再上映までの道のり

絵本出版

通常、封切り時に大きな評判を得るか高い評価を受けることのなかった映画は忘れられることが多い。その理屈に従えば、日本での『不思議の国のアリス』もそういう運命をたどったとしても不思議ではなかった。しかし、この映画は封切りの20年後、昭和48年に再上映されるまで、完全に忘れられていたというわけではなかった。その要因の一つに、絵本での出版が連続と続いていたことが挙げられる。表4に、ディズニーの『ふしぎの国のアリス』絵本の刊行歴を示す。

表4. 昭和のディズニー版『ふしぎの国のアリス』関連書籍の刊行歴

昭和27年11月	『Walt Disney's ふしぎの国のアリス』 ディズニーのまんがえほん
昭和28年8月	『不思議の国のアリス』 ディズニーの漫画絵本
昭和32年4月	『ウォルト・ディズニーの ふしぎのくにのアリス』 小学館の幼年絵本
昭和36年1月	『ふしぎの国のアリス』 講談社のディズニー絵本
昭和36年11月	『ふしぎの国のアリス』 講談社のディズニー絵本デラックス版
昭和38年5月	『豆ぞうの冒険・ふしぎの国のアリス』 講談社のディズニー童話
昭和44年5月	『ふしぎの国のアリス』 ディズニーの名作絵本
昭和45年1月	『ふしぎの国のアリス』 ディズニー名作童話全集
昭和47年2月	『ふしぎのくにのアリス』 ディズニーのジャンボ絵本
昭和49年7月	『ふしぎのくにのアリス』 ディズニー幼稚園図鑑
昭和40年代	『ふしぎの国のアリス』 講談社 ディズニー絵本コミック版
昭和50年10月	岡田忠軒解説『Alice's Adventures in Wonderland / 不思議の国のアリス』 NOVEL THEATER SERIES 17、語学春秋社
昭和52年8月	『ふしぎのくにのアリス』 ディズニーランド絵本
昭和54年5月	『ふしぎの国のアリス』 ディズニー・アニメブック
昭和56年5月	『ふしぎのくにのアリス』 ディズニーランド名作えほん
昭和57年4月	『ふしぎの国のアリス』 ディズニー=アニメランド
昭和58年	『ふしぎの国のアリス』 ディズニーパック（名作カセット絵本）
昭和59年11月	『ふしぎの国のアリス』 国際版・ディズニー名作童話 （原本フランス版、Fernand Nathan, 1982.）
昭和60年5月	Dodoは“ドド”、Cheshire-Catは“チシャねこ”。Mad Hatterは“いかれぼうしや”に* 『ふしぎの国のアリス』 ディズニー名作童話全集 （原本フランス版、Fernand Nathan, 1982.）
昭和62年5月	『アリスちゃんバッグ』 講談社 ディズニーおでかけ絵本 7、1987.5.
昭和62年10月	『ふしぎの国のアリス』 ディズニー名作童話館 Dodoは“ドド”、Cheshire-Catは“チシャねこ”。Mad Hatterは“いかれぼうしや”に*

（大西小生「『不思議の国』書誌（ディズニー絵本・ノヴェライズ）」

<http://www.eonet.ne.jp/~shousei/alice/Reference-Disney.html> より再構成）

*引用者註：おそらくビデオ発売の吹き替えに合わせたのではないと思われる。

昭和28年の上映後も、ディズニー絵本としての『ふしぎの国のアリス』は継続的に出版されていることが判る。他の多くのディズニー映画と同様、再上映までの間、絵本という形でずっと読み続けられていたのだ。

だが、ここで疑問が出てくる。なぜ、封切り時に評判にならなかった『不思議の国のアリス』が絵本として生き残ったのか。これには、当時のウォルト・ディズニー・カンパニーの不振が理由として考えられる。

『リトル・マーメイド』は、ディズニーが徐々に作った童話に基づく長篇アニメーションだ。どのくらい久々かという、ウォルト・ディズニーがこの世を去った翌年の一九六七年に『ジャングル・ブック』(イギリスのノーベル賞作家ラドヤード・キプリング原作)を公開して以来二二年ぶりだ。ヒロインが主人公の古典童話を原作にしたものだと『眠れる森の美女』以来三〇年ぶりということになる。

(中略)

一九八四年などはディズニーが乗っ取り屋たちに狙われて、解体寸前だった。このときにパラマウント映画からやってきて経営を立て直したのが、その後ディズニー会長となったマイケル・アイズナーだった¹⁵。

1950年代以降にアメリカ本国で公開されたディズニーの長編アニメーションを表5に示す。

表に明らかなように、『ふしぎの国のアリス』公開以降、いわゆる「名作」ものの製作頻度

表5. 1950年代以降の、本国でのディズニー・アニメーション公開状況

本国公開年	タイトル・原題
1950年	シンデレラ <i>Cinderella</i>
1951年	ふしぎの国のアリス <i>Alice in Wonderland</i>
1953年	ピーター・パン <i>Peter Pan</i>
1955年	わんわん物語 <i>Lady and the Tramp</i>
1959年	眠れる森の美女 <i>Sleeping Beauty</i>
1961年	101匹わんちゃん <i>One Hundred and One Dalmatians</i>
1963年	王様の剣 <i>The Sword in the Stone</i>
1966年	くまのプーさん <i>Winnie the Pooh</i>
1967年	ジャングル・ブック <i>The Jungle Book</i>
1970年	おしゃれキャット <i>The Aristocats</i>
1973年	ロビン・フッド <i>Robin Hood</i>
1977年	ピアンカの大冒険 <i>The Rescuers</i>
1981年	きつねと猟犬 <i>The Fox and the Hound</i>
1985年	コルドロン <i>The Black Cauldron</i>
1986年	オリビアちゃんの大冒険 <i>The Great Mouse Detective</i>
1988年	オリバー・ニューヨーク子猫物語 <i>Oliver & Company</i>
1989年	リトル・マーメイド <i>The Little Mermaid</i>

(Wikipedia 日本語版の記事より再構成)

が激減している。ディズニーの名作映画の中では失敗作ともいえる『ふしぎの国のアリス』がずっとディズニー絵本の一冊として残ってきたのは、1960年代以降のディズニーの名作路線からの変更と、それに続く新作の低迷期があったことによると思われる。「名作絵本」のレパートリーとして、『アリス』に代わる候補がなかったのだ。

レコードのリリース

『ふしぎの国のアリス』は、絵本だけではなく、紙芝居やレコードの形でも発売されていた。現在もヤングエポックから発売されている紙芝居の場合、ナレーションのカセットテー

プと一緒にしているものもある。紙芝居の出版状況については今後の調査を待つこととし、ここではレコードの発売経緯を見てゆく。

雪村いづみが映画公開に先立って『不思議の国のアリス』の歌の SP 盤を出している。これが日本でのディズニー版『ふしぎの国のアリス』のレコードの第一号である。その後、「ディズニーランド・レコード」のシリーズとして日本コロムビアとキングレコードからそれぞれレコードが出ている。現在確認できているレコードの種類と発売年を表 6 に示す。実際には、ここに示すより多くのリリースがあった筈である。

表 6. ディズニーランド・レコード『ふしぎの国のアリス』のレコード・テープ

発売年	レコード会社	種類	備考
1963	日本コロムビア*	EP	
1968	日本コロムビア*	EP	ピクチャーレコード
1972	キングレコード	LP	
1972	キングレコード	EP	LP の抜粋
不明	キングレコード	ドーナツ盤	歌のみ
1980	日本コロムビア*	EP	
1980	日本コロムビア*	カセット	

*同一音源

(国立国会図書館所蔵のレコードに適宜追加した)

日本コロムビアから出た EP 盤は、同一音源が何度もレコード化・テープ化されている。これは映画を短いドラマにしたレコードで、冒頭に映画の主題歌、A 面終わりに主題歌の歌詞を変えたもの、B 面最後に冒頭と同じ主題歌が挿入されている。一方、同じ「ディズニーランド・レコード」として出されたキングレコード版は LP, EP それにドーナツ盤の 3 種が出ている。発売は再上映の前年、1972 年であった。LP 盤が映画を脚色した上での音声ドラマであり、EP 盤がその抜粋、ドーナツ盤は A 面が主題曲、B 面が石川進による白兔の歌(LP とは別録音)となっている。

LP 盤は、まさに映画を音声で現したようなものであり、ジャケットにも、以下の言葉が述べられている。

このディズニーランド・レコードは、みなさんに親しまれ喜ばれているディズニーの傑作映画をテーマにして、映画の漫画をそのままジャケットにちりばめ映画の音楽をそのまま使って、それぞれのキャラクターに当を得た配役で、ストーリーを盛り上げていく、音楽おとぎ物語のレコードです¹⁶。

日本コロムビア版とキングレコード版のドラマの主要なキャストを表 7 に、キングレコード版 LP の章立てを表 8 にそれぞれ示す。

表 7. 二社のレコードにおける配役

登場人物	日本コロムビア	キングレコード
アリス	杉田郁子	上原ゆかり
白うさぎ	熊倉一雄	楠トシエ
ドド		高山秀雄
双子		五十嵐五十鈴 / 美鈴
いもむし		堀絢子
あやしいねこ		稲垣隆史
バラのおばさん	香椎くに子	
帽子屋	大山豊	ブレスン・フォー*
あばれうさぎ	前沢迪雄	ブレスン・フォー*
女王	初井言栄 (女王さま)	加藤みどり (女王)

*キングレコード版では Mad Tea-Party の部分は「きちがいパーティー」として、ブレスン・フォーによる合唱となっている。

表 8. キングレコード版『ふしぎの国のアリス』の章立て

- 第 1 面
1. 序曲・ふしぎの国のアリス*
 2. ふしぎな国へ行きましょう
 3. 急げ急げ急げ*
 4. こげや涙の海を行け
 5. 大工とアシカの話*
 6. どんどん燃やせ
 7. ゴールデン・アフターヌーン*
- 第 2 面
8. けむりぶみ
 9. あやしいねこ*
 10. なんでもない日おめでとう*
 11. お家に帰りたい*
 12. バラを赤くぬれ*
 13. フィナーレ・ふしぎの国のアリス*

*EP 盤に収録された章

レコードもまた、現在の我々が DVD ソフトで映画を鑑賞するに近い手近なメディアとして、再上映までの間『ふしぎの国のアリス』の記憶をつなぎ止めた大きな要因であったに違いない。レコードが継続的に販売されていた理由についても、絵本と同じくディズニーの新作の不振があったことは間違いない。

再上映の状況

『不思議の国のアリス』は昭和 48 年、ウォルト・ディズニー・カンパニー 50 周年記念映画として、題を『ふしぎの国のアリス』と変えた上で再上映された。再上映に際しては日本語吹き替え版が作られ、配給された。その後この映画は昭和 62 年にも吹き替え版が再上映

表 9 『ふしぎの国のアリス』再映状況

上演年	タイトル	日本語	併映
1953 年	不思議の国のアリス	字幕	水鳥の生態
1973 年*	ふしぎの国のアリス	吹替**	ボンゴ他
1987 年	ふしぎの国のアリス	吹替***	シンデレラ

*ディズニー 50 周年記念と銘打たれている。

**ポスターに「日本語版」と明記。

***パンフレットに「日本語版」と明記。

される。過去三度の上映について、表 9 に示す。

興味深いのは、最初の再上映の行われた 1973 年という年である。その前年の 1972 年には、日本では『別冊現代詩手帖 ルイス・キャロル』が出版され、キャロルが再発見された年となる。1973 年は沢渡朔『少女アリス』が刊行され、牧神社より『アリスの絵本』が刊行されている。さらに全国で『アリスの絵本』展」が開催され、雑誌『牧神』の創刊準備号（マイナス 3 号）でも、キャロルとアリスの小特集が組まれている。まさにこの年はアリス・ブームのさなかであった。ディズニー 50 周年記念として『ふしぎの国のアリス』が上映される受け皿は整っていたといえよう。

もちろん、時間的な前後関係をそのまま論理的な因果関係に結びつけることはできない。ディズニーの映画の観客層とアリス・ブームの中にいた読者層が一致しているかどうかは一考の余地があるし、後述するように、アメリカで『ふしぎの国のアリス』が再上映され、成功したと思われる節もある。しかし、当時のアリス・ブームの影響を全く受けずに日本で再上映を決定したと考えるのは無理がある。アリス・ブームのみが再上映の要因であったとはいえないが、アリス・ブームが再上映の要因の大きな一つであるとはいえるであろう。

ディズニーの『ふしぎの国のアリス』について『別冊現代詩手帖』に一切言及がないことから、絵本ではなく映画としての『ふしぎの国のアリス』が初めて認識されたのは、この時と考えられる。『別冊現代詩手帖』によるキャロル・リバイバルとそれに続くアリス・ブームがあればこそ、ディズニーの『アリス』の影響が決定づけられたのではないか。

再上映時のパンフレット

配給側の資料として、二度の再上映の際のパンフレットを見てゆく。

1973 年版のパンフレットは四つ切り版（Quarto）、14 ページ、併映の『ハワイアン・ホリデー』『ボンゴ』と併せて一冊となっており、パンフレットの後半が併映二作の記事である。一部カラー。内容は四コマのカラーズチル、解説、ズチルを使ったあらすじ紹介、登場人物一覧と挿入歌紹介。日本語版・本国版ともに声優の記載はない。解説では、この映画を「すばらしいミュージカル・ファンタジーの傑作」としている。記述には封切り時の解説の流用も認められる。

.....すばらしいミュージカル・ファンタジーの傑作で、テーマ曲の「ふしぎの国のアリス」と「生まれない日おめでとう」の歌は最大のヒット・ソングになりました。

ルイス・キャロルが 100 年程前に、可愛がっていた親友の娘アリス・ブレザンス・リッデルと連れだって庭を散歩している時アリスにせがまれる儘に話して聞かせたことを、...

...¹⁷

一方、1987 年版のパンフレットは A4 版、22 ページ。併映の『シンデレラ』と併せて一冊となっており、パンフレットの後半がシンデレラの記述になっている。全ページ、カラーで、解説とズチルを豊富に使った絵本風のあらすじ紹介、挿入歌題名一覧（日本語のみ）が

記載されている。日本語版・本国版とも声優の記載はない（併映の『シンデレラ』には声優の記載あり）。このパンフレットの解説には、一点、見逃せない記述がある。キャロルがアリスに求婚したという、「求婚伝説」が取り上げられているのだ。

「ふしぎの国のアリス」は、ディズニーの第 11 作目の長編漫画映画です。初めての日本公開は 1954 年（原文ママ）。そして 1973 年のリバイバル公開以来 14 年ぶりの登場になります。

（中略）

……キャロルは生涯独身でしたが、この頃 20 才以上も年下のアリスに求婚し、母親に一蹴され周囲の話題になったといわれます¹⁸。

日本で求婚伝説が一般に知られるようになったのは 1972 年の『別冊現代詩手帖』所収の種村季弘「遊戯の規則 キャロル再訪」がきっかけであり、1975 年の角川文庫版『不思議の国のアリス』（福島正実訳）の福島自身による解説と、同年に発売された旺文社文庫版『不思議の国のアリス』の高山宏による解説により一般化したと考えられる¹⁹ので、1973 年の再上映時には一般化していなかった求婚伝説が、ここにきてディズニーの映画の解説にまで使用されたことになる。

再上映時（昭和 48 年）のマスコミの記事

一方、最初の再上映時である昭和 48 年における映画雑誌の記述はどうであっただろうか。封切りではなく再上映ということから、当然、雑誌での取り扱いは少ない。基本的に新作映画を紹介する『キネマ旬報』では、映画紹介の記事がない。『スクリーン』では昭和 48 年 7 月号に、併映作品を含めて見開きで紹介記事が掲載されている。『ロードショー』でも昭和 48 年 8 月号に、1 ページ 3 本充ての映画紹介ページで紹介されている。ただし、『ロードショー』ではこの号と次の 8 月号との連載で、アニメーション映画史に関する座談会の記事が掲載されている。この記事は、夏休みのアニメーション映画が当たり年である（『シャーロットのおくりもの』『スヌーピーの大冒険』『ふしぎの国のアリス』『哀しみのベラドンナ』と、4 作品が公開されている）ということから企画されたもので、司会は日野康一、話者は淀川長治、山口紘子、小野耕世である。『ふしぎの国のアリス』については 9 月号で取り上げられている。ここで小野耕世が興味深いことを話している。

小野 『ふしぎの国のアリス』は、はじめてアメリカで公開されたときヒットしませんでした。妹さんが書いた伝記によればディズニーみずから失敗作とみとめています。それまでのマンガは感情的に訴えようとしたのに、『アリス』は知性に訴えて失敗したというのです。

ところがディズニーが亡くなって、3 年ほど前にアメリカで再公開されたらこんどは当たった。初公開のとき受け入れられなかったハイカラなもの、シュールなものが、現代に

ぴったりだった。

アリスは薬を飲んで夢の世界をさまよいますよね。ヒッピーから見れば、アリスは LSD をのんで幻覚旅行したわけです。ナンセンスな面白さが発見されました²⁰。

小野のこの発言が正しいとすると、1970 年前後にアメリカで『ふしぎの国のアリス』が再上映され、好評を博していたことになる*。日本において再度『ふしぎの国のアリス』を公開することに抵抗は少なかったと思われる。

また、この座談会をみても、昭和 48 年という時代背景のもとでの再上映は、概ね好評であったと見て良いと思われる。

テレビ放映

『ふしぎの国のアリス』の二度目の再上映のあった昭和 62 年には、すでにビデオ・ソフトリがリリースされている。この時期について映画の受容のみを論ずるのは意味がない。よって、二度目の再上映についてここでは触れず、昭和 48 年以降に放映/リリースされたテレビ放映やビデオといった、他のメディアでのディズニー版『ふしぎの国のアリス』の公開について見てゆく。

最初にテレビであるが、過去に三度放映されている。昭和 54 年 4 月 4 日 19 時 30 分から (TBS)、昭和 56 年 1 月 4 日 14 時から (TBS)、そして平成 4 年 12 月 27 日 19 時 20 分から (NHK 総合) である (テレビでの放映題名は『不思議の国のアリス』)。TBS で放映された 2 回と NHK で放映された 1 回では、声優が異なっている。TBS 版の主要な声優について表 10 に示す。

表 10. TBS 版『不思議の国のアリス』配役

登場人物	声優
アリス	キャロライン洋子
ハートの女王	ベギー葉山
帽子屋	熊倉一雄
三月つさぎ	山崎唯

(『週刊テレビガイド』昭和 54 年 4/6 特大号および昭和 56 年 1/2・1/9 合併特大号より)

NHK 版では土井美加と小沢寿美恵が声優として出演したことが判っている。これは現在も販売されているビデオ版の配役であり (アリス: 土井美加、ハートの女王: 小沢寿美恵)、平成 4 年の放映ではビデオ版の吹き替えを放映したことが判る。テレビ放映に際し新たな声優での録音を行っていないことから考えて、TBS での放映の配役は、昭和 48 年と昭和 62 年に上映された劇場版吹き替えの配役であると考えられる。二度の再上映の間に 2 回、二度目の再上映後に 1 回、『不思議の国のアリス』はテレビに登場したことになる。また、これらの放映はすべて二カ国語放送で行われている。昭和 28 年以降、原語での放映・上映は、

* 英語版 Wikipedia では、『ふしぎの国のアリス』は 1954 年にテレビ『ディズニーランド』でカット版が放映されたのを除けば、1974 年に初めてアメリカの劇場で再上映されたとされている。しかしこの小野の発言は 1973 年のものであり、1974 年の記憶違いということはありません。

このテレビ放映が最初となる。

家庭用ビデオ・デッキが普及しだしたのは 1980 年前後であることから、TBS でのテレビ放映をビデオテープに収めて、繰り返し観た家庭も多かったと思われる。この影響は無視するべきではない。

ビデオ・ソフトの影響

テレビ放映だけではなく、ビデオ・ソフトとしても『ふしぎの国のアリス』は登場している。ビデオについては、昭和の末ごろより発売が開始されている。当初、『ふしぎの国のアリス』はポニー（1984 年 10 月 5 日～1986 年末）、その後バンダイ（1987 年 9 月 28 日～）がビデオ・ソフトとして販売している。1990 年代にはパイオニア LDC からレーザーディスクも発売されていた。現在はディズニーの系列であるブエナ・ビスタから DVD として発売されている。バンダイ版はその発売時期から、同年に劇場で『ふしぎの国のアリス』が再上映されたのを受けてのリリースであると考えられる。

前述の声優だけではなく、吹替内容も映画版とは違っている。顕著なのが「気違い」を「いかれた」とした点であろう。

例)

Mad Hatter：キチガイ帽子屋（映画吹替）*	いかれ（た）帽子屋（ビデオ吹替）
Unbirthday：生まれない日（映画吹替）	なんでもない日（ビデオ吹替）

ビデオでの吹替は、初期のポニー版から現在の DVD（『ふしぎの国のアリス スペシャル・エディション』）にいたるまで、変更はない。つまり、1987 年の映画再映時には、映画とビデオで、違った吹替が併存していたことになる。

発売当初のビデオ・ソフトは高価であり（ポニー版：16,800 円、バンダイ版：10,800 円。現行のブエナ・ビスタ版 DVD は 2,940 円）、ポニー版に関しては、一般家庭の購入数は少なかったのではないかと、おそらくはレンタルが主流であったのではないかとと思われる。そう考えた場合、必ずしも 1980 年代にビデオ・ソフトを購入して『ふしぎの国のアリス』をよく視ていた家庭は多くなかったと推測される。ただし、1985 年 11 月放映の『今夜は最高！』で、タモリ、小林克也、原田知世の三人による『ふしぎの国のアリス』のパロディ・コントを行っているが、この時に Unbirthday の訳語として映画の「生まれない日」ではなくビデオの「なんでもない日」を使っている。そこから考えれば、ディズニーあるいは放送局は、少なくともテレビ放映では用語で問題を起こす可能性の少ないビデオ版に準拠する方針であった可能性は考えられる。

ビデオが安価になり、LD（後には DVD）も普及したバンダイ版の発売以降、特に 1990 年代以降はビデオの影響が大きいと考えられるが、それ以前の「アリス＝ディズニー」というイメージには、ビデオによる影響はそれほど大きくないと思われる。むしろ絵本、レコー

* 映画吹替の訳語についてはパンフレット記載の訳語による。Unbirthday についても同様。

ド、あるいはテレビ放映の影響が大きかったと考えた方が自然である。

しかしこれについてはビデオ・ソフトの価格といった面から論じてあまり意味がない。ビデオ・ソフトが流通する 1980 年代後半以前に、ディズニー版『ふしぎの国のアリス』の影響がすでにあるかどうかを確認する必要がある。

1980 年代の雑誌の記述

ビデオ・ソフトの流通以前の影響を考える上で、当時の雑誌の記載を見てゆきたい。1980 年代初頭のアニメファンの間での「ロリコン・ブーム」のころ、いくつかの雑誌が『アリス』あるいはルイス・キャロルを特集したが、雑誌『Animec』の昭和 56 年における特集では、高橋康也のインタビューが掲載されている。

(引用者註：インタビュー冒頭にて)

安座上 ディズニーの「不思議の国のアリス」はご覧になりましたか？

高橋 日本で最初に封切られた時に見たきりですが。アニメのテクニックを駆使して、映像的な美しさはかなりとらえていると思いましたが、ある種の限界も感じさせてくれましたね。キャロルのアリスの表面をかいなでているという感じがな。それ以上のつつこみ、特にアリスの心理的な深みに入っていないという気がします。作品自体にすごみとか無気味さはないですね。

安座上 アリスが夢から醒めたところで終わっちゃいましたね。あのお姉さんの独白があってこそ、「アリス」だと思うのですが。

高橋 ええ、カットされてましたね。キャロルの場合はいくつかの入れ項構造ってというか、物語が困いになっていて、それが奥行きを与えるってことがあるわけでした。(ディズニーの場合は)まァ、アメリカ文化のわかりやすさっていうことでしょうか(笑)²¹

ここで高橋は否定的な口調でディズニー版『ふしぎの国のアリス』を語っている。しかしここで注目すべきなのは安座上の質問であろう。ディズニー版『アリス』については自明の存在として話をしているのだ。

一方、翌年に出された雑誌『ふぁんろーど』(現『ファンロード』)のアリス特集でも、やはりディズニーについての言及がある。

これだけの人気のアリスゆえ、すでに一九三〇年代に白黒映画も登場♡ ディズニーのアニメにもなりましたが、アメリカの PTA には「なんだこりゃ！」とふしだらなアニメとこきおろされました(アチラでは単純なモノしか受けないんですねえ)。……²²

この号では漫画家・和田慎二のインタビューも掲載されており、そこで和田は自分がディズニー版『アリス』に影響を受けていることを述べている。

そうすると、アリスのイラストで一番好きなのは……

「そう、やっぱりテニエルですね。やはりラッカムはチョコロイチョコロイ……いまひとつという感じで」

(中略)

……あとは、ディズニーの、アニメのアリスがもっぱら……」²³

和田の生年は昭和 25 年であるので、日本での『不思議の国のアリス』封切り時に映画を観たとは考えられない。和田は昭和 49 年発表の漫画『キャベツ畑でつまずいて』でアリスを登場させ、自身の自画像ともいえるキャラクター岩田慎二に『アリス』への思い入れを語らせている。作中で『別冊現代詩手帖・ルイス・キャロル』(1972)を登場させていること²⁴から、昭和 47 年の時点ではすでにルイス・キャロルに興味を持っていたことは間違いない。インタビューの 3 年前、あるいは前年にテレビ放映されたものを見て、改めてディズニーに興味を持ったとも考えにくいことから、和田がディズニーの『アリス』を知ったのは絵本がレコード、あるいは、最も遅く見積もった場合で昭和 48 年の再上映の際となる。

『ふぁんろーど』のこの号では、読者投稿によるアリスのイラストも掲載されている。その内の 2 点を図 1 に示す。



図 1. 読者投稿イラスト
(『ふぁんろーど』1982 年 9 月号、p.25 (左) および p.34 (右) 掲載のもの)

一見して解るように、左図における Bread-and-butterfly の表現、それに右図におけるチェシャ猫の表現法は、ディズニー映画の表現をそのまま使ったものだ。この二つの読者イラストには、明らかにディズニーの影響が見取れる。

昭和 62 年の正月映画として『ドリームチャイルド』が日本公開されるが、『キネマ旬報』に掲載されたその紹介記事の中にもディズニーへの言及がある。

国民性の違いというべきか、白の騎士をヒーローとして描こうと試み、それが原作を壊

すことになるよとわかるや、とたんにやる気を失ったディズニーは、いかにもアメリカのドリーマーだ。……

(中略)

……ところで、ちょうどこのころ、すでにウォルト・ディズニーは「不思議の国のアリス」映画化の構想を抱いていたという。……²⁵

昭和 62 年に発売された雑誌『少女座』の第 5 号(9 月号)『アリスの本』でも、ディズニーへの言及がある。

まず映画では、ウォルト・ディズニーが最も早くアリスに目をつけたようです。有名なディズニー版アニメーション映画『不思議の国のアリス』については別項でくわしく解説していますが……²⁶

上記引用以外でも『アリスの本』では「ウォルト・ディズニーとアリス」の題で、初期のアリス・コメディーと 1951 年版『ふしぎの国のアリス』の記事がある。

バンダイ版ビデオの発売される昭和 62 年 9 月までに、ルイス・キャロルを特集した雑誌(当然、原作寄りの編集)や、『ドリームチャイルド』の雑誌解説(映画の内容からして原作者寄り)でも、こういった記事が見いだされることが判る。そして、バンダイ版ビデオは劇場での『ふしぎの国のアリス』再上映と同年にリリースされている。ビデオ普及までに「アリス=ディズニー」の図式が成立していたのは確実である。

現在の訳語の使用状況

翻って、現在の日本において、ディズニーの『アリス』の影響は何に由来するものが大きい。これを、ディズニー版『アリス』の登場人物の訳語から見てみよう。訳語の比較を表 11 に示す。

表 11. 訳語の比較

原文	訳語			
	映画字幕	映画吹替	ビデオ吹替	グッズ・絵本(06 現在)
White Rabbit	白兎	白ウサギ	(白)うさぎ*	(白)うさぎ(絵本) 白ウサギ(グッズ)
Cheshire-Cat	笑い猫	チェシャ猫(73) チシャ猫(87)	チェシャ猫	チシャ猫
Mad Hatter	気違い帽子屋	キチガイ帽子屋	いかれ帽子屋 マッドハッター***	いかれ(た)帽子屋**(絵本) マッドハッター(グッズ)
March Hare	あばれ兎	3 月ウサギ	3 月ウサギ	三月ウサギ
Unbirthday	非誕生日	生まれない日	なんでもない日	たんじょうびじゃないひ なんでもない日
Young Oysters		カキ		かき(絵本) ヤング・オイスター(グッズ)

(映画字幕、映画吹替はパンフレットの記載から。ビデオ吹き替えは DVD リーフレットより確認)

*吹替では、単に「うさぎ」。DVD の登場人物一覧では「白うさぎ」

**初期の Mad Hatter の絵本における訳語は「きちがいぼうしや」

***2006 年発売の DVD の登場人物一覧のみ「マッドハッター」。吹替では「帽子屋」。グッズに合わせて名前を変更した可能性が高い。

Unbirthday のように、どちらかというビデオ起源と思われるものもあるが、現在、ディズニーの登場人物名として使用される訳語は、映画のものでもビデオのものでもなく、絵本とグッズの訳語である。グッズについては昭和 58 年開園の東京ディズニーランドの影響を忘れてはいけないであろう。映画と切り離された形でディズニーのキャラクターやグッズが提供される空間であることから、キャラクターの受容には大きな影響力を持っていると考えられる。たとえば現在『シンデレラ』というと、ペローの原作「サンドリヨン」やディズニーのアニメーションよりも東京ディズニーランドのシンデレラ城を思い浮かべる人も多いであろう。この影響については今後の研究を待ちたい。

また、White Rabbit を指して「遅刻うさぎ」「時計うさぎ」といういい方をよく目にする。これらは映画・ビデオ・絵本・グッズいづれにも存在しない訳語である。おそらく絵本すら読まず、グッズあるいは特定場面の絵だけを見ての消費者の勝手な命名と考えられるが、ここに物語から切り離されたグッズそれ自身が新たに物語を持つという現象を見ることも可能である。

結論

ディズニー映画『ふしぎの国のアリス』の日本での公開状況を見てゆくことで、以下のことが判明した。

- ・ 昭和 28 年の封切り時には、『アリス』やキャロルについて、ルイス・キャロルは女性であるといった間違いや映画の筋がそのまま原作だと勘違いするといった、現在見られるような原作を読まないことによる間違い・勘違いがすでに見受けられる。
- ・ 昭和 9 年に国内封切りされたパラマウント版『不思議の国のアリス』について、ディズニー映画封切り時のパンフレット、雑誌に記述がある。このことは、昭和 28 年当時には、まだパラマウント映画の存在が知られていたことを示している。
- ・ 『白雪姫』等の扱いに比べ、『不思議の国のアリス』の封切り時の雑誌での扱いは大きくなかった。日本封切り時には、それほど大きな影響を及ぼしたとは考えにくい。
- ・ 1973 年の再上映までこの映画が忘れられないでいた要因に、ディズニーの絵本あるいはレコードとして『ふしぎの国のアリス』が継続的に出されていたことが挙げられる。これは、1950 年代以降のディズニーの新作映画の不振の結果、絵本やレコードのレパトリーから名作路線の一つである『ふしぎの国のアリス』が外されなかったということによる。
- ・ 1973 年の再上映時の雑誌記事からみて、ディズニー映画としての『ふしぎの国のアリス』が一般に認知されるようになったのは再上映時のことと考えられるが、この時期は、前年に『別冊現代詩手帖』が出され、日本においてルイス・キャロルの再発見がされた時であった。ディズニー版『ふしぎの国のアリス』は、それによって再上映が受け入れられたということも可能である。1972 年のキャロルリバイバルなくしてディズニーのイメージ形成はなかった。

- ・ 1980年代前半の雑誌記事より、その頃には、すでにディズニーの『ふしぎの国のアリス』は自明の存在であった。これはビデオ・ソフトが普及する以前である。これには絵本以外に物語レコード、テレビ放映の影響があったと考えられる。
- ・ 現在、ディズニー版『アリス』の登場人物等の訳語の使用状況をみると、ディズニーの影響は映画やビデオの影響もあるが、それらよりむしろ絵本やグッズの影響が大きい。また、グッズ普及以降はビデオを見ず、絵本も読まず、単に特定場面の画像やグッズのみの影響を受けている例も見いだされる。

今後、再上映から1970年代末までのディズニー映画の影響、紙芝居の販売状況、東京ディズニーランドの開園がディズニーの『アリス』受容に及ぼした影響が判明することで、この映画がいかにして日本で受容されるに至ったかがより鮮明になる。また、日本における『アリス』受容は、原作を中心とするものとディズニー映画を中心とするものと、完全に二極分化している。『別冊現代詩手帖』の刊行以降に生じた現代のアリス受容について、二極化の過程を調査することも今後の課題である。

謝辞

本稿作成にあたり、NHKによる『ふしぎの国のアリス』テレビ放映の状況を佐藤正明氏よりご教示頂きました。また、TBSでの放映時期については株式会社東京放送、ビデオ・ソフトの発売時期については株式会社ポニーキャニオン、株式会社バンダイにご教示頂きました。宮垣弘氏からは日本コロムビア製作のカセットテープ版『ふしぎの国のアリス』の存在をご教示頂きました。また、中島俊郎氏には本稿をまとめるに当たりご助言を頂きました。感謝致します。

引用・参考文献

¹柳生すみまる「2002 ディズニー革命 Vol.20 日本におけるディズニー絵本 Part1」

『DISNEY FAN』2002年8月号、pp.47-51

² ボブ・トマス『ウォルト・ディズニー』（玉置悦子、能登路雅子訳）講談社 pp.236-238、1976、1994 邦訳：1995

³ ボブ・トマス『ディズニー伝説』（山岡洋一、田中志ほり訳）日経 BP 社 p.282、1998 邦訳：1998

⁴ おかだえみこ『歴史をつくったアニメ・キャラクターたち』キネマ旬報社 p.19、2006

⁵ 南部圭之助「二つの映画」松竹洋画版『不思議の国のアリス』パンフレット pp.6-7

⁶ 登川直樹「外国映画批評 不思議の国のアリス」『キネマ旬報』昭和28年9月下旬号 p.84

⁷ 『スクリーン』昭和28年8月号 p.101

⁸ 『不思議の国のアリス』プレスブック 巻末、1953年

⁹ 岡俊雄「鑑賞講座『不思議の国のアリス』」『映画の友』昭和28年9月号 pp.88-89

¹⁰ 「新映画」朝日新聞 昭和28年8月25日夕刊

¹¹ 「映画」毎日新聞 昭和28年8月24日夕刊

¹² 木下信一「昭和9年のパラマウント映画『不思議の国のアリス』」『Mischmasch』(8)13-29、2006年

-
- 13 同上。
- 14 和田誠『ことばの波止場』白水社 pp.65-66、2006年(元版は1995年)
- 15 有馬哲夫『ディズニーの魔法』新潮新書 pp.170-171、2003年
- 16 キングレコードLP『ディズニー映画より ふしぎの国のアリス』ジャケット、1972
- 17 『ふしぎの国のアリス』パンフレット p. 2、1973年
- 18 『ふしぎの国のアリス』パンフレット、p. 1、1987年
- 19 木下信一「日本のサブカルチャーにおける《ルイス・キャロル=ロリータ・コンプレックス》像の定着史」Mischmasch (7) 74-95、2004年
- 20 「ロードショー考現学 17 アニメーション映画うらばなし(第2回)」『ロードショー』昭和28年9月号 p.237
- 21 安座上学(聞き手)「ルイス・キャロル研究の第一人者 高橋康也教授に少女ブームを聞く」『Animec』第17号「特集 "ろ"は、ロリータの"ろ"」p.36、1981年
- 22 「アリスってなーに？」『ふぁんろーど』1982年9月号「シュミの特集 アリスと女の子の世界」p.28
- 23 「ヒゲクマ先生はアリスがお好き？」(和田慎二インタビュー)『ふぁんろーど』1982年9月号「シュミの特集 アリスと女の子の世界」p.30
- 24 和田慎二「キャベツ畑でつまずいて」『明日香ふたたび』集英社マーガレット・コミックス p.121、1978年(初出『別冊マーガレット』(1974年))
- 25 吉岡一夫「永遠の少女ドリームチャイルド」『キネマ旬報』1986年11月上旬号、p.53
- 26 「これもアリス、あれもアリス 映画、お芝居のアリス」『少女座』No.5『アリスの本』p.50、1987